



埼玉県立
上尾鷹の台高校

小・中学校の「学び直し」

「学び直し」と 手厚い不登校支援で 生徒の可能性を広げる

◎2008年に埼玉県立上尾沼南高校と埼玉県立上尾東高校が統合再編して開校。校訓は「鷹揚（ようよう）。オオタカが悠然と大空を舞うように、力強く社会に飛躍してほしいという願いが込められている。単位制を採用し、2、3年次では生徒の個性や進路希望に応じた3つの履修モデル（進学・文系モデル、進学・理系モデル、資格技能取得モデル）を用意。オオタカをモチーフにしたマスコット「ようよう」を製作し、生徒募集に生かすなど、広報活動にも力を入れる。

設立	2008(平成20)年
形態	全日制・単位制／普通科／共学
生徒数	1学年約240人
10年度入試合格実績(現浪計)	2008年4月開校のため、卒業生はいない
住所	〒362-0021 埼玉県上尾市原市2800
電話	048-722-1246
Web Site	http://www.takanodai-h.spec.ed.jp/

変革のステップ

背景

◎開校時から、基礎基本の定着と、不登校経験のある生徒への学習機会の保証に力を入れた学校づくりを行う

STEP 1

実践

◎学校設定科目で小・中学校段階の内容の定着、個別学習支援システムで不登校支援を図る

STEP 2

成果

◎高校志願倍率は順調に推移し、入学生の学力も向上。不登校から普通学級に戻る生徒も出てくる

STEP 3

教師に警戒心を抱き
距離を置く生徒たち

埼玉県立上尾鷹の台高校は、さいたま市の北に接する上尾市にある普通科高校で、埼玉県立上尾沼南高校と埼玉県立上尾東高校を統廃合して、2008年4月に開校した。

同校の特色は、面倒見の良さにある。小・中学校段階の「学び直し」に積極的に取り組み、基礎基本の定着を図ってきた。不登校経験のある生徒も学び続けられるよう、独自の「個別学習支援システム」も整える。小・中学校時代に学校での学びを十分経験できなかった生徒に、基礎学力を付け、学ぶ喜びを感じさせることが、開校当初からの基本方針だ。同校の立ち上げから携わる岡野行男教頭は次のように語る。

「不登校だからといって、必ずしも学習に興味がありません。学力が低かったりするわけではありません。学びへの意欲があるにもかかわらず、集団行動への苦手意識から学びの機会を失っている生徒を1人でも救えればと思いました」

09年度に赴任した保健主事の柴田久美子先生は、同校の生徒について次のように語る。

「どの学校の生徒も新任教師には距離を置くものですが、本校の生徒は警戒心が他校生以上に強いと感じました。大人や学校に不信感を抱いた経験があるために、相手がどんな

人か分かるまで心を許さないのでしょう。半面、根は素直でまじめな生徒が多く、仲良くなれば親しみを持って接してきます」
 そうした生徒の良さをいかに引き出し、主体的に学校生活を送れるようにするか。それが同校の重要な課題であった。

「コアベーシック」で小・中学校段階の内容を学び直す

基礎基本の定着を図る取り組みの中心は、学



埼玉県立上尾鷹の台高校教頭
岡野行男 Okano Yukio

教職歴31年。同校に赴任して3年目。「生徒には今やれることに全力をぶつけてほしい」



埼玉県立上尾鷹の台高校
浅見晃弘 Asami Akihito

教職歴22年。同校に赴任して1年目。主幹教諭。「みなで生徒を支えていきたいという先生方の思いを大切にしていきたい」



埼玉県立上尾鷹の台高校
柴田久美子 Shibata Kumiko

教職歴30年。同校に赴任して2年目。保健主事。「生徒の気質や人間関係などを考慮し、バランスのとれた指導を心掛けていきたい」



埼玉県立上尾鷹の台高校
久保井啓成 Kuboi Hiroaki

教職歴・赴任歴共に3年目。2年次担任。「生徒の性格や様子をしっかりと把握し、一人ひとりに応じた適切な指導をしていきたい」

校設定科目「コアベーシック」だ。義務教育段階で身に付けるべき学習内容を学び直し、進路実現に向けた土台づくりをする。国語と地歴・公民を「ベーシック人文」、数学と理科を「ベーシック理数」、英語を「ベーシック語学」とし、1年次で週1時間ずつ取り組む。

内容は、国語は平仮名の書き取りから、漢字の読み書きや基礎的な文法、社会は都道府県や県庁所在地の位置、数学は小数や分数の計算、正負の数の加減乗除、英語はアルファベットや基本的な英単語から英文法まで、高校での学びの土台となる基礎的事項だ（P.26図左）。

授業はプリントによる自学自習で進める。いずれの分野もNo.1から順に取り組み、出来た生徒は次のプリントに進む。プリントは1分野につき100枚用意し、順次難しくなる。同一分野内での教科のバランスは、例えば「ベーシック人文」なら、No.1〜6が国語、No.7〜9が地理No.10から再び国語というように、バランス良く配置している。

生徒はプリントを終えると、進捗表に日付を記入し、自分の進み具合を確認する（P.26図右）。一目で進捗が分かるようにすることで、生徒同士が見せ合って刺激し合うなど、良い意味での競争意識も芽生えているという。

教師も生徒全員の進捗を一覧表に記入しておく。特定の分野だけ進んでいない生徒や、進捗が落ちている生徒などを把握し、個々への声掛

けに生かす。基本的に自学自習で生徒自身に進めさせるが、生徒の主体性だけに任せるわけではない。

「プリントが難しくなると、どこから調べなのか、何を質問すれば良いのかも分からない生徒が散見されるようになります。放っておけば、手が止まったまま授業が終わってしまうこともあります。生徒の状況を進捗表で確認し、添削の合間を見て机間巡視し、『先週はあまり進まなかったから、今日は出来る問題から頑張ろう』『資料のこの部分を調べてみたら』など、声を掛けています」（柴田先生）

個に応じた指導が、生徒の学ぶ意欲を喚起している。

生徒の学力向上に応じた教材のリニューアルが鍵

「コアベーシック」では各クラスに2人の教師が配置され、クラスの生徒を半分ずつ受け持つ。生徒はプリントを1枚終えることに担当の教師に提出。教師はその場で添削し、理解できている生徒に対しては次に進むよう指示し、誤答が多い生徒や丁寧に取り組んでいない生徒には、解説後、やり直しをさせる。主幹教諭の浅見晃弘先生は次のように話す。

「生徒が提出してすぐに採点できれば、生

「コアベーシック」で使用するプリントと進度表

コアベーシック理数 小数の足し算と引き算 組 番氏名 理数2

1. 次の計算をせよ。

(1) $\begin{array}{r} 1.2 \\ + 2.5 \\ \hline \end{array}$	(2) $\begin{array}{r} 0.7 \\ + 3.1 \\ \hline \end{array}$	(3) $\begin{array}{r} 4.9 \\ + 3.1 \\ \hline \end{array}$
(4) $\begin{array}{r} 0.5 \\ + 0.8 \\ \hline \end{array}$	(5) $\begin{array}{r} 3.7 \\ + 2.4 \\ \hline \end{array}$	(6) $\begin{array}{r} 1.7 \\ + 5.5 \\ \hline \end{array}$
(7) $\begin{array}{r} 0.8 \\ - 0.5 \\ \hline \end{array}$	(8) $\begin{array}{r} 4.2 \\ - 2.1 \\ \hline \end{array}$	(9) $\begin{array}{r} 4.5 \\ - 2.6 \\ \hline \end{array}$
(10) $\begin{array}{r} 6.2 \\ - 0.7 \\ \hline \end{array}$	(11) $\begin{array}{r} 8.5 \\ - 6.6 \\ \hline \end{array}$	(12) $\begin{array}{r} 5.7 \\ - 0.9 \\ \hline \end{array}$
(13) $\begin{array}{r} 1.5 \\ + 2.3 \\ \hline \end{array}$	(14) $\begin{array}{r} 1.7 \\ + 4.8 \\ \hline \end{array}$	(15) $\begin{array}{r} 5.3 \\ + 1.9 \\ \hline \end{array}$
(16) $\begin{array}{r} 7.3 \\ + 3.4 \\ \hline \end{array}$	(17) $\begin{array}{r} 5 \\ + 9.6 \\ \hline \end{array}$	(18) $\begin{array}{r} 2.7 \\ + 8 \\ \hline \end{array}$

コアベーシック人文進度表

組 番 ()

※課題が終わるごとに日付を記入しましょう。

日付	日付	日付	日付	日付	日付	日付	日付
1	21	41	61	81			
2	22	42	62	82			
3	23	43	63	83			
4	24	44	64	84			
5	25	45	65	85			
6	26	46	66	86			
7	27	47	67	87			
8	28	48	68	88			
9	29	49	69	89			
10	30	50	70	90			
11	31	51	71	91			
12	32	52	72	92			
13	33	53	73	93			
14	34	54	74	94			
15	35	55	75	95			
16	36	56	76	96			
17	37	57	77	97			
18	38	58	78	98			
19	39	59	79	99			
20	40	60	80	100			

図左／「コアベーシック理数」の「小数の足し算と引き算」（100枚中2枚目に当たる）のプリント。問題は1枚につき表裏合わせて36題ある
 図右／進度表に該当のプリントが終わったら日付を書き込み、次のプリントに進む *学校資料をそのまま掲載

徒は不明点を残さずに先に進めます。そのため、授業中にすべての生徒の添削指導を終えるのが理想です。しかし、生徒によって1時間で3〜4枚進む者や、そもそも理解が追

直しても良いことになっていきますが、限られた時間で、生徒の学力に合わせた教材を用意することには難しさを感じます。少しずつでも改善を行っていくことが目標です」

いついていなくて指導が必要な者もいます。実際には、授業ですべての採点を終わらせることは出来ていません。生徒の学力を底上げしながら、いかに教師の負担を減らせるかが、今後の課題です」

プリントの内容も改善が必要だと、2年次担任の久保井啓成先生は話す。

「教材は開校時に当時の教師が作成したプリントを基にしていますが、入学者の学力は年々上がっているため、成績上位の生徒でも意欲的に取り組めるような内容にする必要があります。09年度には、数学と理科のプリントを見直しましたが、年度前に作業する時間がなく、授業と並行しての作業になりました。各教科担当が随時プリントの内容を見

生徒の意欲や態度を評価し
 学びへの前向きな態度を養う

学校設定科目である以上、「コアベーシック」は成績評価の対象になる。しかし、生徒の学力が、そのまま評価に直結するわけではない。

「私たちが最も重視するのは、学力の高さではなく、取り組む姿勢や意欲です。進度が遅いという理由で評価を低くしたりはしません。出欠や授業態度、到達状況など、日々の授業への取り組み方すべてを見て評価します。取り組みの過程や意欲が重要であることを、生徒に実感してほしいからです」（久保井先生）

「コアベーシック」での評価は、授業前に準備をしているか、私語はしていないか、プリントに積極的に取り組んでいるかなどの点を見る。授業態度などに問題がある生徒には、注意を促すと共に、進度表と一体となった評価表に注意回数を記録しておく、減点の対象とする。

「コアベーシック」に対する生徒の評価は高い。これがあるから志望したという生徒も多い。手厚い指導により生徒の学ぶ意欲を高めるといふ同校の方針は、浸透しつつあるようだ。

「新課程では、義務教育段階の内容の学び直しを積極的に後押ししています。生徒に基礎基本を定着させた上で、高校生としての学力を付けさせ、更に進路実現につなげてほし

いという思いを教師間で共有する。私たちが足並みをそろえられるかが、取り組みの成功の鍵になると思います」（浅見先生）

不登校者のみの個別学習で 転学・退学を防ぐ

取り組みの二つ目の柱は、集団になじめない生徒を支援する「個別学習支援システム」だ。

同校は、埼玉県から指定を受けて支援室の運営に必要な人員を確保し、開校当初から不登校経験のある生徒を積極的に受け入れてきた。

不登校経験のある生徒は、高校入学時に過去にとらわれずに、新たな気持ちで高校生活に臨もうとする。しかし、それでも集団生活になじめず、学校に足が向かなくなる生徒もいる。そうになると、いったんクラスから離れて「個別学習支援室（以下、支援室）」で指導を受けることになる。いわば「登校しながら不登校状態から脱していく」のである。

支援室で支援を受ける生徒は、次のように認定される。不登校状態となった段階で、担任や教育相談員（臨床心理士などの資格を持った非常勤職員）などが、不登校指導を担当する校務分掌である教育相談委員会に報告（委員会メンバーは、岡野教頭、保健主事の柴田先生、保健部教育相談係、年次代表、個別学習支援室担任、教育相談員など）。委員会は、状況を把握して

生徒・保護者と面談した上で、支援室利用の可否を判断する。対象は1年次のみで、支援期間は3か月。その間にクラスに戻れない場合は、生徒が延長願いを提出し、再び認定の可否を判断する。

支援室は最大2クラス設置でき、定員は1クラス5人。学校生活は通常のクラスと同じで、担任が朝のSHRを行い、1時間目から6時間目まで各教科の授業を受け、帰りのSHRを行い帰宅する。そして3か月間、支援室で過ごし、通常のクラスに戻れる自信を取り戻した生徒は教室へと帰っていく。

08年度は7人の生徒が支援室を利用し、4人が教室に戻っていった。岡野教頭は次のように評価する。

「認定を受けたものの支援室にすら登校できず退学してしまった生徒、一度クラスに戻ったけれども再び不登校になり支援室で授業を受ける生徒もいます。すべての生徒を不登校から救えるわけではありませんが、支援室があつたからこそ進級できた生徒もいます。1人でも生徒を不登校から救えるのであれば、この取り組みの意義は大きいと思います」

大切なのは 不登校に陥る前の相談

支援室によって不登校状態の生徒を支援する

一方、事前の支援策として、教育相談体制の充実にも取り組む。非常勤ではあるが教育相談員がおり、教職員の係が連絡調整に当たり、生徒はもちろん、保護者からの相談も受け付ける。相談委員会では週1回、配慮が必要な生徒への対応を協議する。それを担任に伝え、一貫した支援態勢がとれるようにする。学校での友人関係、家庭・家族のこと、進路に関する事など、さまざまな悩みが相談されるといふ。

「支援室の存在は確かに重要ですが、それも生徒・保護者との継続的な面談やアドバイスが出来る相談体制があつてこそそのものです。学校に行きたくない、つらいという状況が深刻化する前に、『一人で悩まずに相談を』と呼びかけています」（柴田先生）

09年度、保護者からの教育相談は95件に上つた。生徒からの相談だけでなく、保護者の話も聞くことが、不登校を防ぐ重要な鍵のようだ。今年、同校は開校から3年目を迎えた。志願倍率は1.5〜2倍と順調に推移し、生徒の学力も年々上がっている。

「今後の課題は、大学に進学できる学力を付けさせると同時に、全員の進路実現を達成することです。多様な生徒への手厚い指導を継続しながら、志望を実現させることは簡単ではないでしょう。しかし、両面のバランスを取りながら、本校に求められる姿を追求していきたいと思います」（岡野教頭）

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2009年9月号指導変革の軌跡「千葉県立姉崎高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)